

## 人間として

昨年の11月9日から11日の3日間、岐阜市を中心に部落解放全国研究会が行われました。その中で、杉原千畝氏の出身地、八百津町の「杉原千畝記念館」を訪ねる研修も行われ、館長さんの熱い思いを聴きました。今回は杉原千畝氏について紹介します。

### 【命のビザ・杉原千畝】

1940年7月、領事代理として赴任していたカウナス（リトアニアの首都）の日本領事館で、ユダヤ人に対して日本の通過ビザを発行することによって、約6千人のユダヤ人の命を救ったのが杉原千畝氏でした。

当時、ヨーロッパ各地でナチスドイツの勢力が拡大し、ナチスはユダヤ人に対して厳しい迫害を加えていました。このユダヤ人にとってただ一つの逃げ場はオランダ領の南米キュラソー島でした。しかし、ここに行くためにはソ連と日本の通過ビザが必



要でした。

このとき日本とドイツは同盟関係にあり、ユダヤ人を助ければドイツに対する裏切り行為になります。杉原氏はビザ発行の許可を得るために日本の外務省に2度にわたって電報を打ちます。しかし、その電報の回答は「発給相成らぬ」でした。この回答を受けてから独断でビザ発給を決断するまでの胸の内を、自らの手記の中に次のように記しています。

「最初の回訓を受理した日は、一晩中私は考えた。考えつくした。回訓を、文字通り民衆に伝えれば、そしてその通り実行すれば、私は本省に対して従順であるとして、ほめられこそすれ、と考えた。（中略）苦慮、煩悶の揚句、私はついに、人道、博愛精神第一という結論を得た。そして私は、何も恐るることなく、職を賭して忠実にこれを実行し了えたと、今も確信している」

また、後に次のように語っています。

「私のしたことは外交官としては間違ったことだったのかもしれない。しかし、私には頼ってきた何千人もの人を見殺しにすることはできなかった。そして、それは人間として正しい行動だった」と。

1947年、帰国した杉原氏を待っていたのは、外務省からの辞職勧告でした。

### 【杉原千畝記念館】

杉原千畝氏生誕100年にあたる2000年7月に開館。館内には杉原氏が発給した『命のビザ』をはじめ、氏の生い立ちやユダヤ人難民の足跡を紹介する写真パネルのほか、当時の領事館執務室を再現した「決断の部屋」があり、ビザ発給当時を回顧する杉原氏の肉声を聞くことができます。

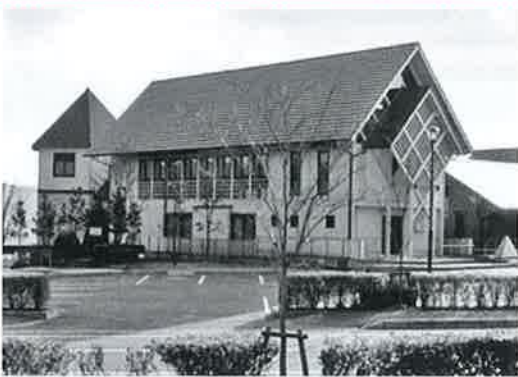
『第二次世界大戦中多くのユダヤ人を救うため、ビザを書き続けた杉原千畝さんの人道的行為こそ、人間に対する本当の愛だと思えます。私たちは、人間としてこの愛をいつまでも心の中に生きつづけさせ、さらに後世に語り継いでいかなければならないのではないのでしょうか。』

戦争について、命の尊さについて、また、人間としての生き方を考えるうえでも、ぜひ、この記念館を訪れてみてはいかがでしょう。

【参考資料】

「決断・命のビザ」(大正出版)  
「六千人の命のビザ」(大正出版)

「愛の決断」(岐阜県八百津町)



▶杉原千畝記念館の外観

#### 杉原千畝記念館

岐阜県加茂郡八百津町八百津  
1071

☎0574・43・2460